

1-6 定量調査結果(71 地点：河口干潟 45 地点、住吉干潟 26 地点)

定量調査は、1 地点につき 25 × 25 × 20cm × 2 箇所 of サンプルング調査である。

定量調査で確認された干潟毎の門別出現種類数、個体数、湿重量の組成比率を図 1-6-1、図 1-6-5 に、地点別の門別種類数、個体数、湿重量の組成比率を図 1-6-2 ~ 図 1-6-4、図 1-6-6 ~ 図 1-6-8 に示す。

また、確認された指標種(埋在性の底生動物)分布図を図 1-6-9 ~ 図 1-6-16 に示す。埋在性の底生動物指標種は、二枚貝類のソトオリガイ・ハマグリ・イソシジミと多毛類のイトメである。

1-6-1 7 月調査結果の概要

・河口干潟では、地点別出現種類数が 1 ~ 9 種、地点別出現個体数が 8 ~ 1,616 個体/m²、地点別総湿重量が 0.11 ~ 175.67g/m² の範囲にあり、総出現種類数は 36 種類であった。

・河口干潟での出現個体数からみた優占種は、節足動物門甲殻綱の *Urothoe* sp. (マルソコエビ属) が最も多く、次いで同じく甲殻綱のコメツキガニが多く確認されている。湿重量からみた優占種は、軟体動物門二枚貝綱のハマグリが最も重く、次いで節足動物門甲殻綱のコメツキガニである。

・住吉干潟では、地点別出現種類数が 2 ~ 11 種、地点別出現個体数が 16 ~ 304 個体/m²、地点別総湿重量が 0.26 ~ 116.26mg/m² の範囲にあり、総出現種類数は 42 種類であった。

・住吉干潟での出現個体数からみた優占種は、節足動物門甲殻綱のチゴガニが最も多く、次いで同じく甲殻綱のヤマトオサガニが多く確認されている。湿重量からみた優占種は、節足動物門甲殻綱のヤマトオサガニが最も重く、次いで同じく甲殻綱のチゴガニである。

・門別の出現個体数の組成比率は河口干潟、住吉干潟ともにカニ、エビ類の節足動物門の組成が最も高い。湿重量においては河口干潟では貝類の軟体動物門の組成が高く、住吉干潟では節足動物門の組成が高かった。

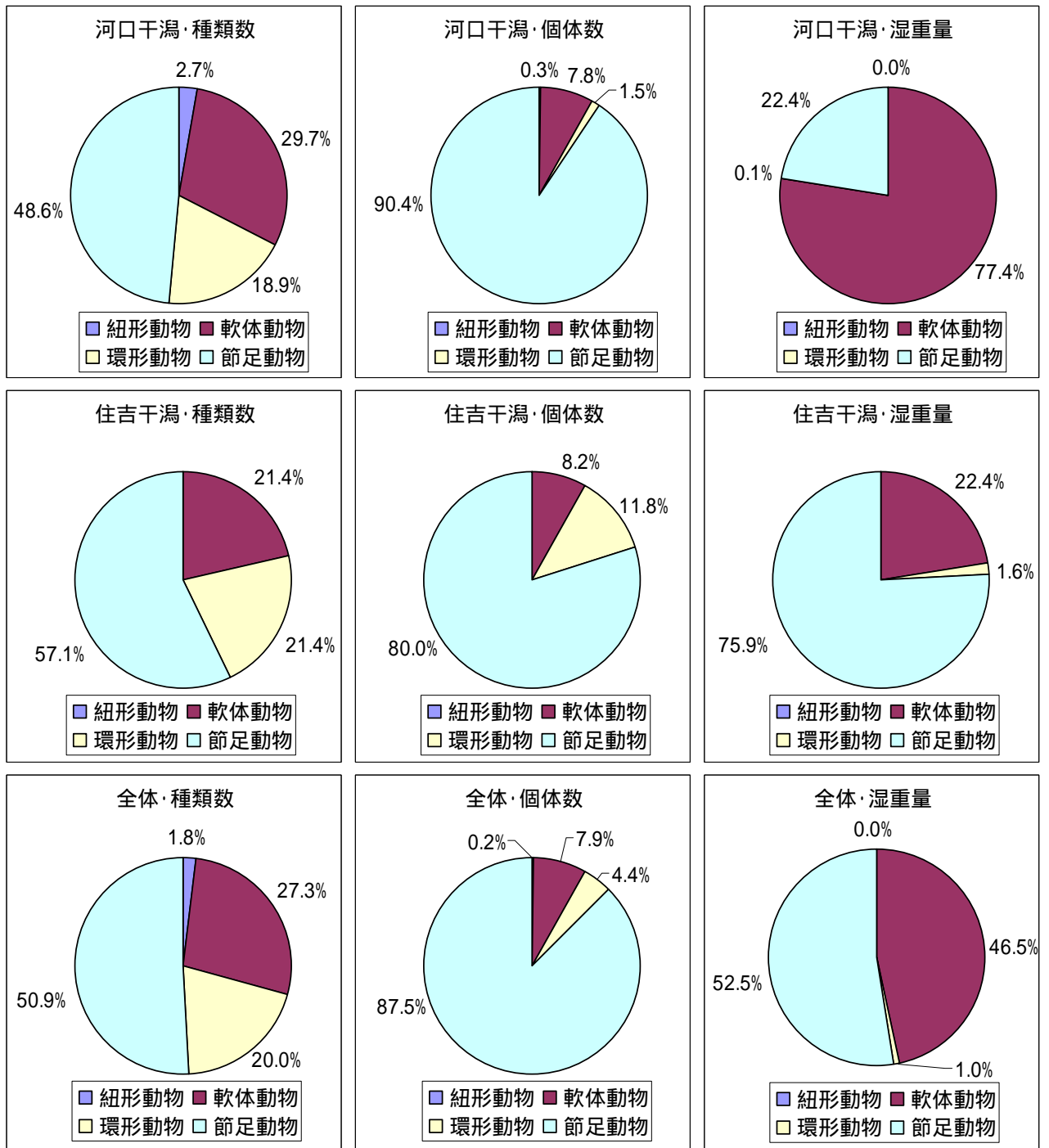


図 1-6-1 定量調査（7月）の組成比率（門別種類数、個体数及び湿重量）

航空写真 平成 18 年 4 月 1 日撮影

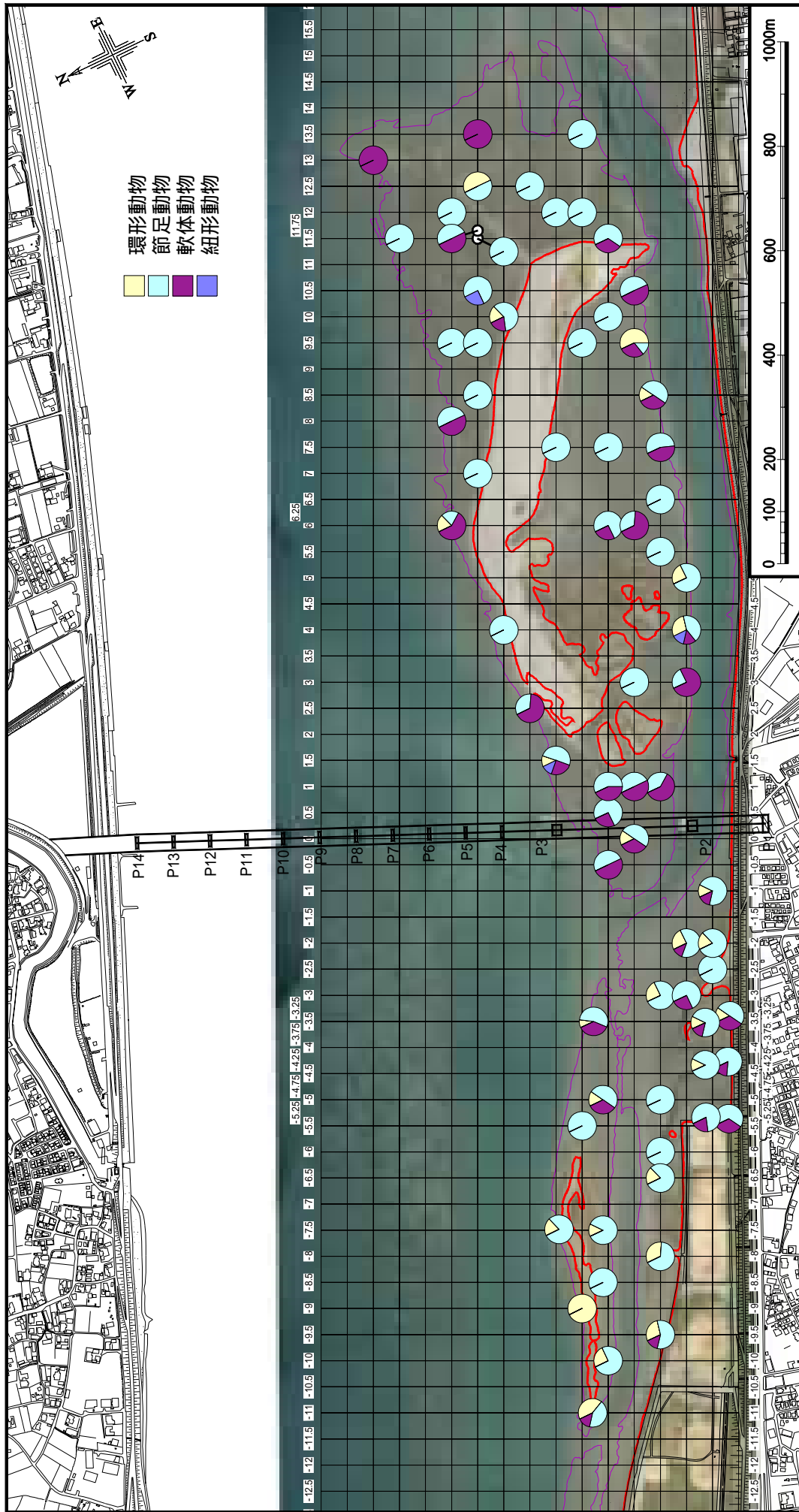


図 1-6-2 門別種類数の組成比率(7月)

航空写真 平成 18 年 4 月 1 日撮影

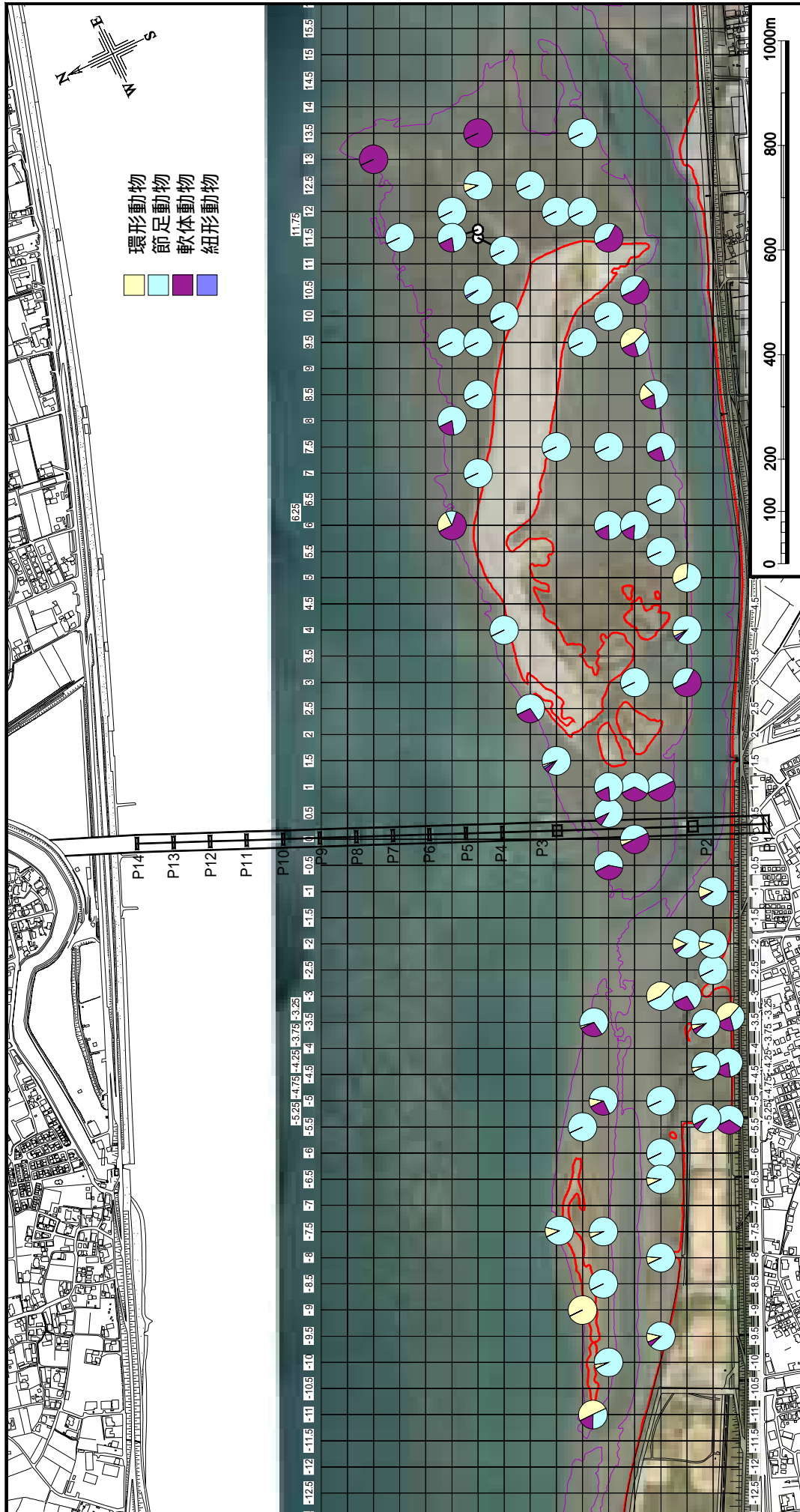


図 1-6-3 門別個体の組成比率(7月)

航空写真 平成 18 年 4 月 1 日撮影

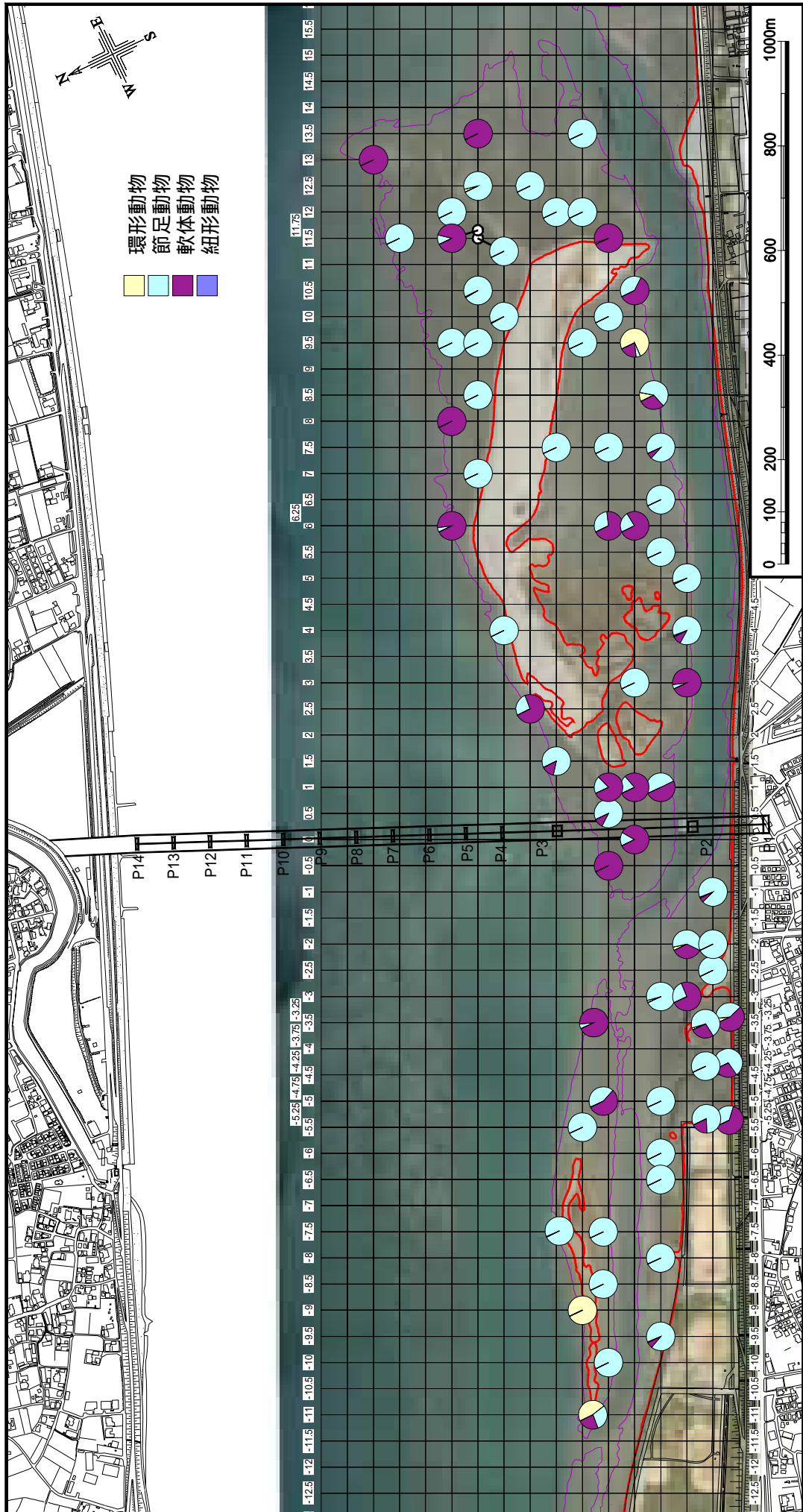


図 1-6-4 門別湿量の組成比率(7月)

1-6-2 10月調査結果の概要

・河口干潟では、地点別出現種類数が1～13種、地点別出現個体数が24～992個体/m²、地点別総湿重量が0.06～401.46g/m²の範囲にあり、総出現種類数は54種類であった。

・河口干潟での出現個体数からみた優占種は節足動物門甲殻綱の *Urothoe* sp. (マルソコエビ属) が最も多く、次いで同じく甲殻綱のコメツキガニが多く確認されている。湿重量からみた優占種は軟体動物門二枚貝綱のコタマガイが最も重く、次いで軟体動物門二枚貝綱のオキシジミである。

・住吉干潟では、地点別出現種類数が3～19種、地点別出現個体数が64～920個体/m²、地点別総湿重量が2.28～341.64mg/m²の範囲にあり、総出現種類数は63種類であった。

・住吉干潟での出現個体数からみた優占種は節足動物門甲殻綱のチゴガニが最も多く、次いで同じく甲殻綱のヨコヤアナジャコが多く確認されている。湿重量からみた優占種は軟体動物門二枚貝綱のオキシジミが最も重く、次いで節足動物門甲殻綱のヤマトオサガニである。

・門別の出現個体数の組成比率は河口干潟、住吉干潟ともにカニ、エビ類の節足動物門の組成が最も高く、湿重量においては河口干潟では貝類の軟体動物門の組成が高く、住吉干潟では軟体動物門と節足動物門の組成がほぼ同じであった。

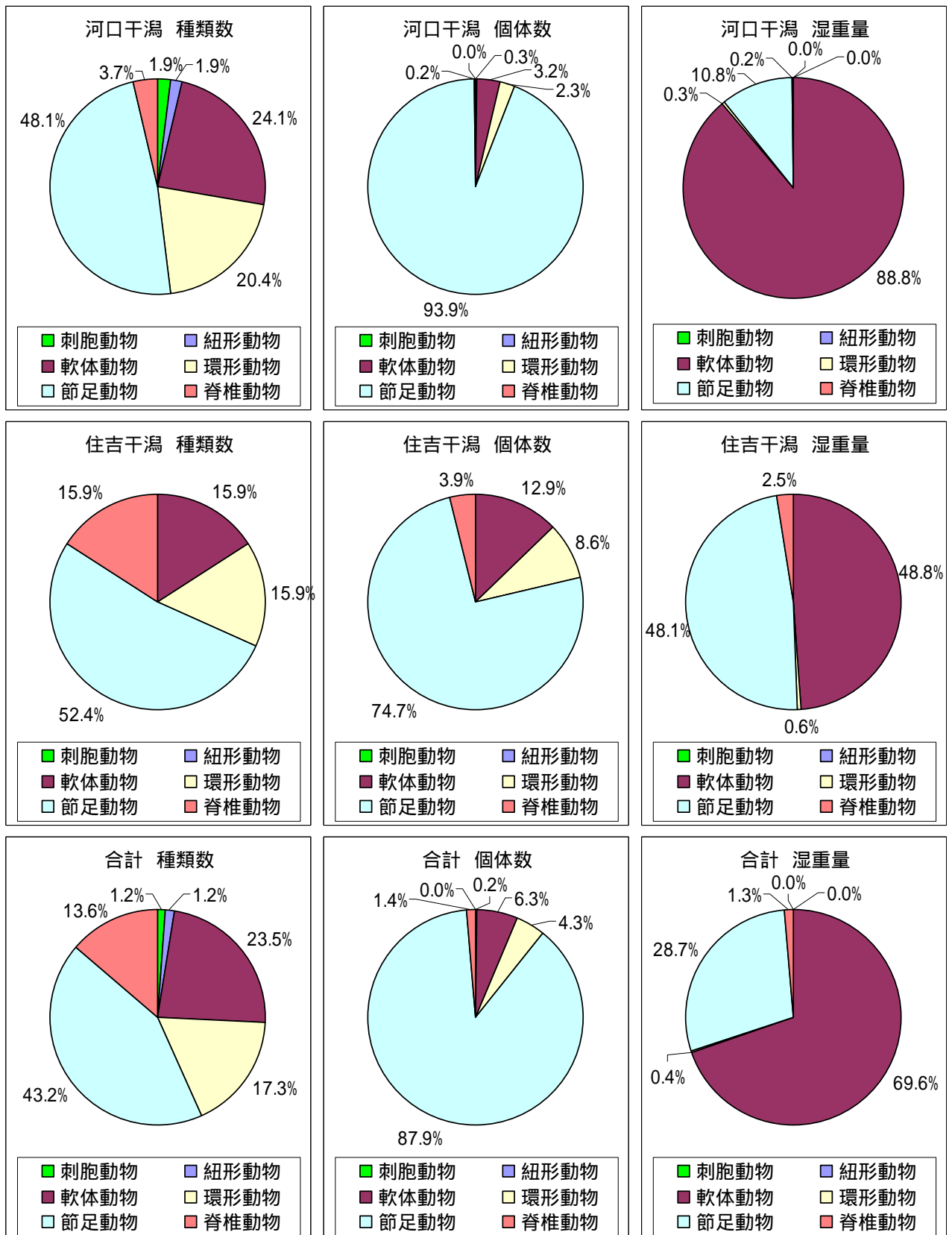


図 1-6-5 定量調査（10月）の組成比率（門別種類数、個体数及び湿重量）

航空写真 平成 18 年 11 月 1 日撮影

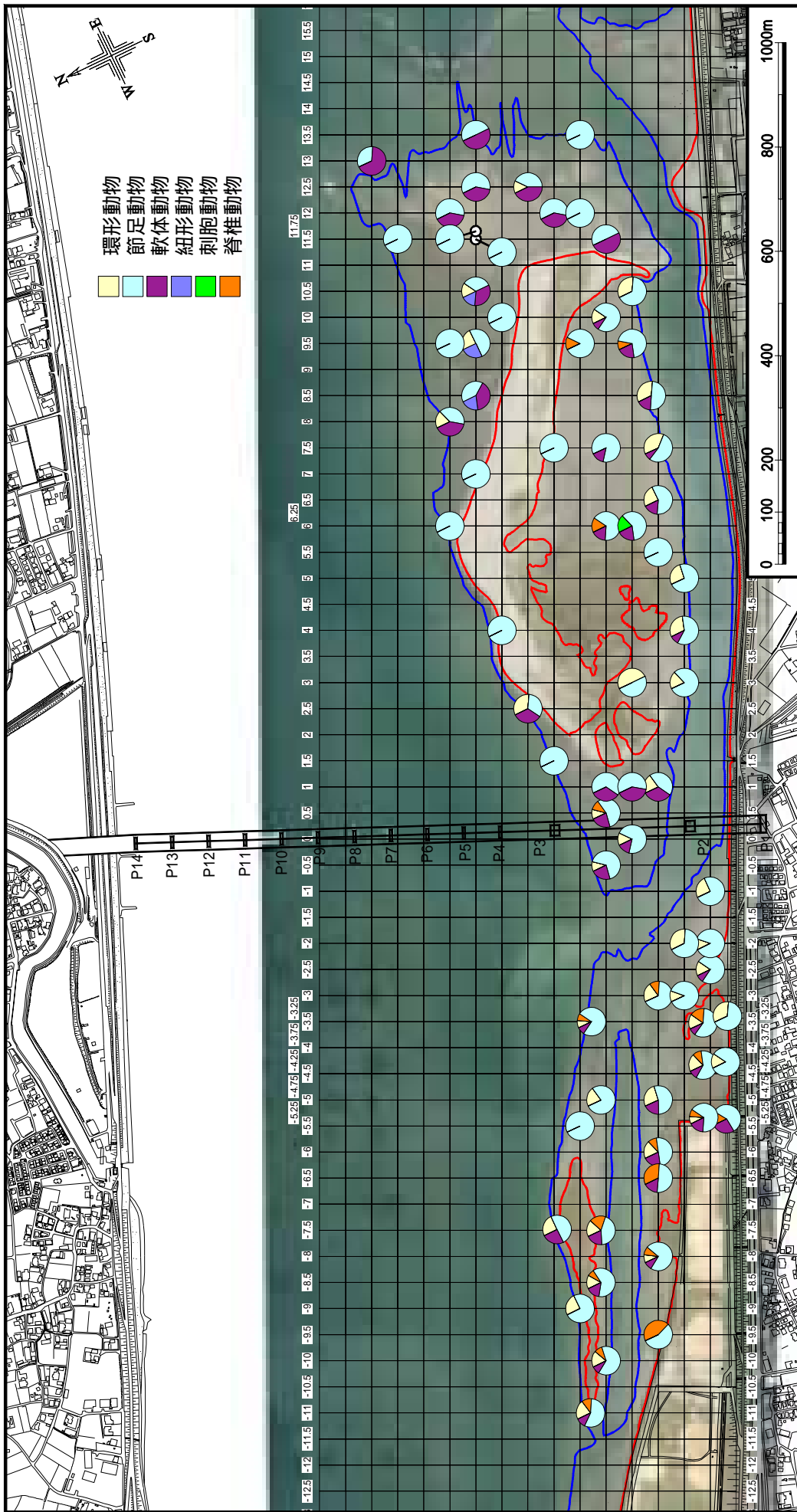


図 1-6-6 門別種類数の組成比率(10月)

航空写真 平成 18 年 11 月 1 日撮影

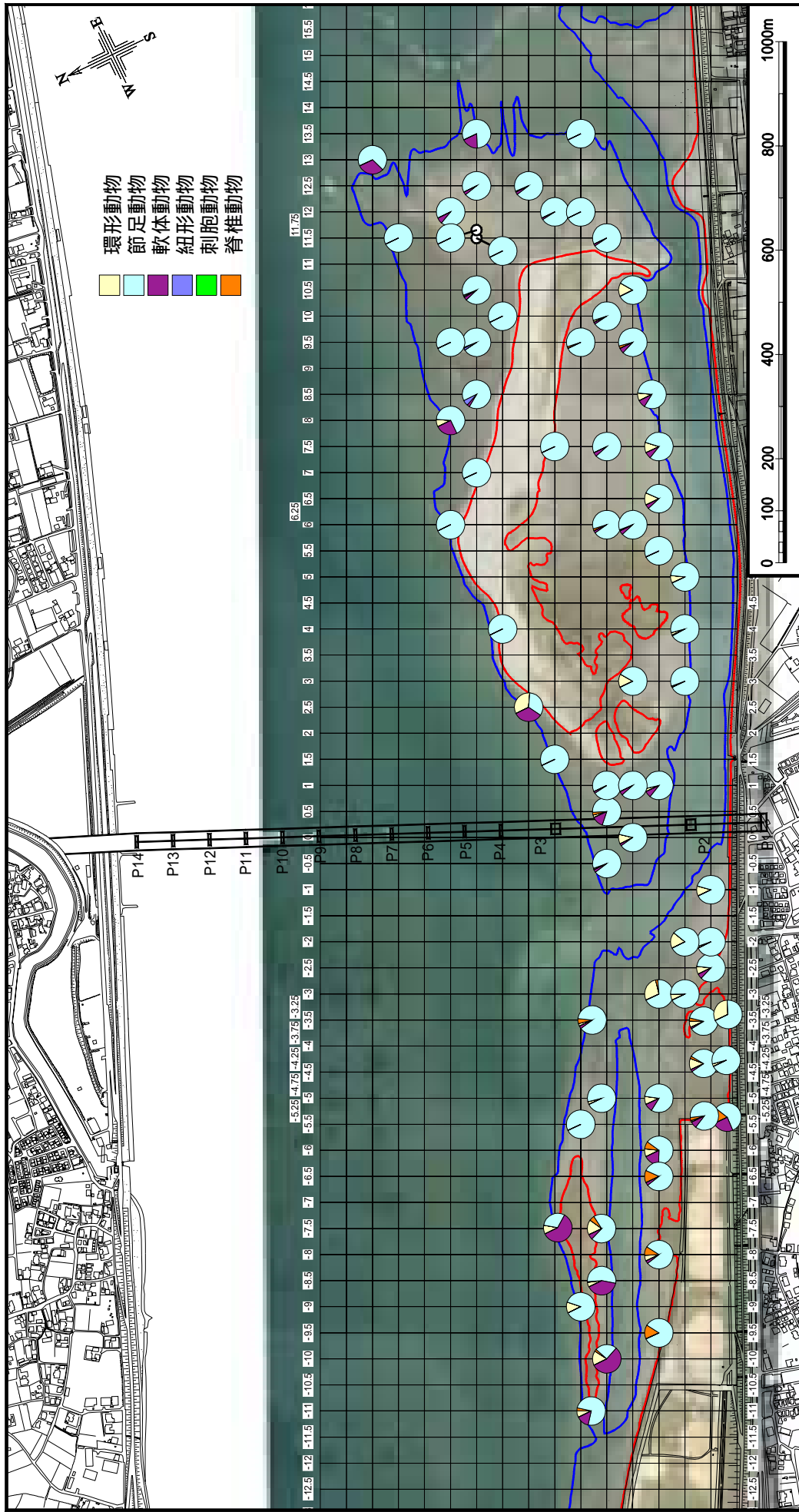


図 1-6-7 門別個体数の組成比率(10月)

航空写真 平成 18 年 11 月 1 日撮影

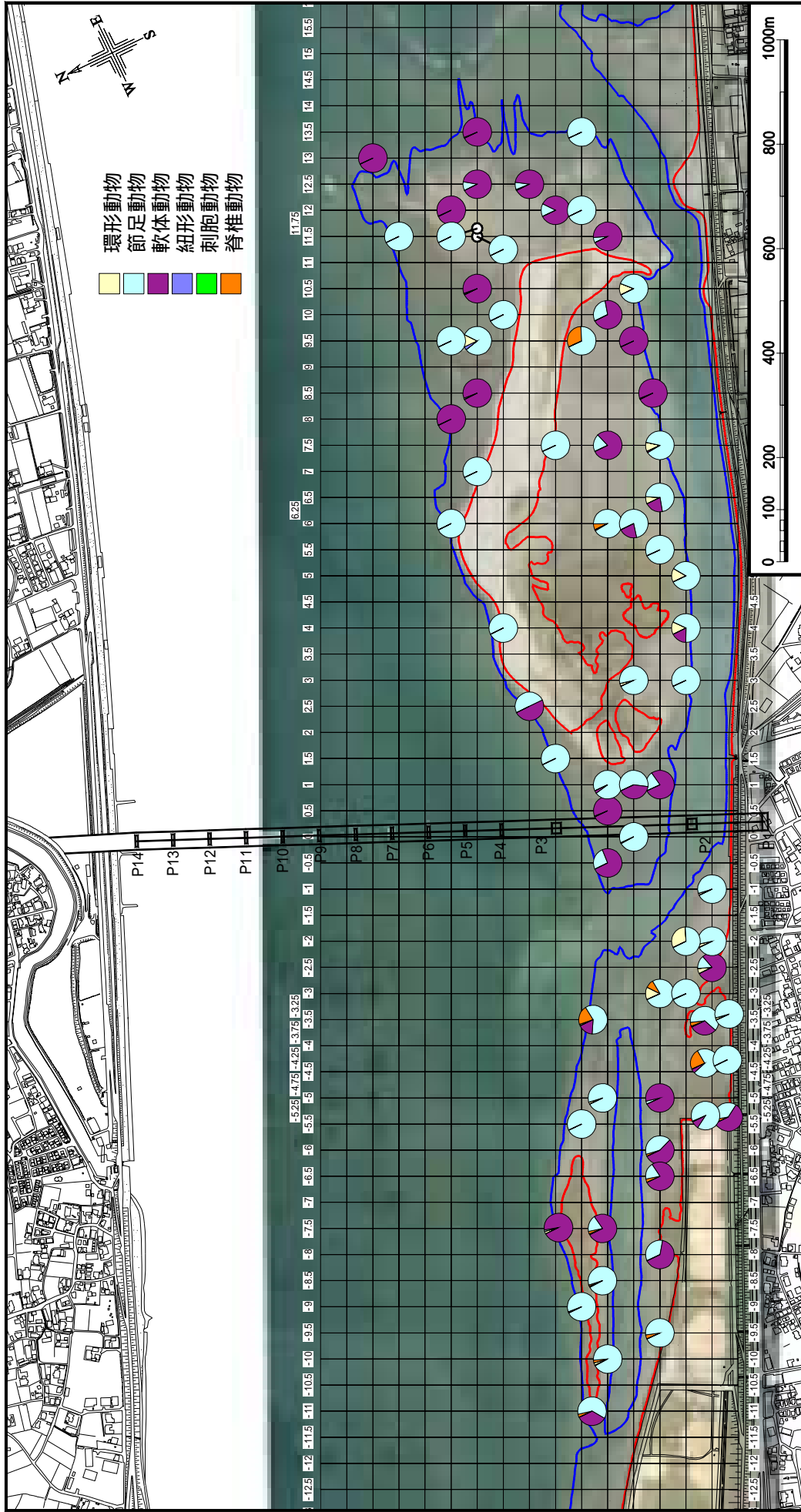


図 1-6-8 門別湿量の組成比率(10月)